様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21　年　5　月　1　日現在

研究種目：基盤研究（A）
研究期間：2005～2008
課題番号：　17251007
研究課題名（和文）　13～14 世紀海上貿易からみた琉球国成立要因の実証的研究―中国福建省を中心に―

研究課題名（英文）　Study of trade ceramics and the beginning of relations between the Ryūkyūs and Fujian in the 13th-14th century

研究代表者
木下尚子（KINOSHITA　NAOKO）
熊本大学・文学部・教授
研究者番号：70169910

研究成果の概要：
本研究は、琉球国（1429 年成立）の形成過程を、13 世紀後半に焦点をあて、おもに考古学的手法によって追究したものである。その結果 13 世紀後半から 14 世紀初頭において沖縄諸島以南の地域と中国福建地域間に明らかな交流が始まっていたことを明らかした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００５年度	4,300,000	1,290,000	5,590,000
２００６年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
２００７年度	4,900,000	1,470,000	6,370,000
２００８年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
年度			
総　計	17,400,000	5,220,000	22,620,000

研究分野：考古学
科研費の分科・細目：史学・考古学
キーワード：考古学・琉球国・13～14 世紀・貿易陶磁・福建省・窯跡

１．研究開始当初の背景

南島（琉球列島）の歴史は、長い先史時代（12 世紀以前）の後、短い期間で国家が形成され点に一つの特徴がある。先史時代の南島において、外来の文化的刺激は常に北から南に及んでいた。11～12 世紀、その最後の波が南島のヤコウガイを求める大和（琉球列島以外の日本列島）の商船とともに南島全域に強く及んだ。その後間もない 13 世紀、沖縄本島で本格的なグスクが登場し、王陵がつくられ、食器に占める中国陶磁の割合が増加する。これまでの研究ではこの変化の要因を 11～12 世紀の大和文化の影響に求めることが多かった。しかしこの視点では、その変化がなぜ南島の北の拠点である奄美大島でなく、影響の薄い南の沖縄本島で生まれたのかを説明できない。この変化の延長上に琉球国が沖縄本島で成立することを考えると、王国形成過程の鍵は 13 世紀に存在すると予測できるのである。

その鍵は中国陶磁の中にあった。11 世紀末~12 世紀初頭以降、当時日本にはいる中国陶磁は九州の貿易拠点である博多にはいり、そこから日本各地・南島に流通していた。1988～1991 年、金武正紀は南島の中国陶磁の中に、博多には少ないが南島に多い 2 種類の磁器

（日本では白磁、中国では青白磁に分類される）のあることを見いだし、これらを今帰仁タイプおよびビロースクタイプと名付けた。田中克子はこれらが 13～15 世紀に福建北部の窯で焼かれたものであり、さらにこれらが中国との直接交渉で南島にもたらされた可能性のあることを 2004 年につかんでいた。この 2 種類の磁器は、13 世紀の南島の変化を示す優れたマーカーといえるのである。

２．研究の目的

本研究は琉球列島と中国とのかかわりを示すマーカーである 2 種類の陶磁に焦点をしぼって、13 世紀以降における 2 地域間の直接交流の開始期を明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

1.　今帰仁タイプおよびビロースクタイプ磁器を対象に、消費地においては所属時期を、生産地においては生産窯を特定して、これらの流通状況を具体的に把握する。

2.　13～14 世紀の琉球列島にかかわる東アジアの歴史状況をあわせて検討する。

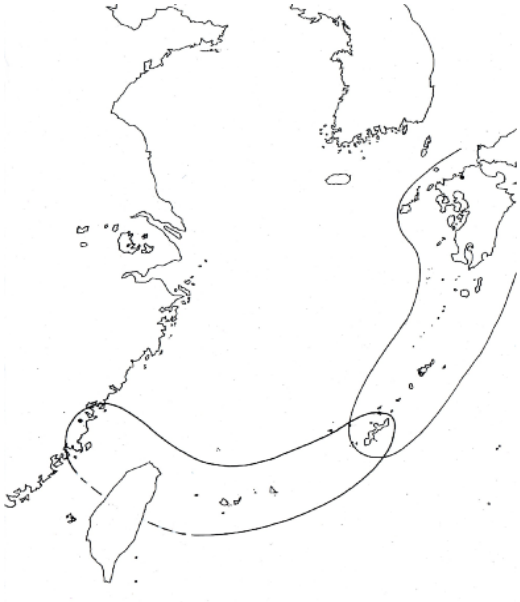
共同研究は考古学者を中心に文献史学者を交えた日本・中国の 12 名で進めた。

４．研究成果

（1）今帰仁タイプは福建省浦口窯で 13 世紀後半～14 世紀前半に焼かれ、ビロースクタイプは同じく閩清義窯・青窯で 13 世紀後半～14 世紀後半に生産された。これらは東および東南アジア各地に輸出され、その一部が琉球列島に直接もたらされた可能性が高い。

（2）13 世紀後半から 14 世紀前半、福建から先島諸島・沖縄諸島にいたる交流圏が新たに形成された。この交流圏は、福建⇒先島諸島⇒沖縄諸島の方向性をもち、中国側の基地として福州港がかかわっていた可能性が高い。

以上から、13 世紀の変化に沖縄諸島以南の地域と福建との交流がかかわっていたことが明らかになった。



５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１８　件）

1. SHINZATO AKITO　2009“Kamuiyaki and Early Trade in the Ryukyu Islands”、Okinawa; the Rise of an Island Kingdom Archaeological and cultural Perspectives. 査読あり
2. Naoko Kinoshita, 2009, Shell Exchange in the Ryukyu Islands and in East Asia, BRITISH ARCHAEOLOGICAL REPORTS,pp.13-39、査読あり
3. 木下尚子 2009「正倉院伝来の貝製品と貝殻－ヤコウガイを中心に－」『正倉院紀要』第 31 号 pp.1～23,宮内庁正倉院事務所、査読あり
4. Naoko Kinoshita, Priceless Shell Bracelets and the Chiefs of Northern Kyushu, Japan (c.2,000 years ago),current world archaeology no.29, Vol.3,No.5,2008 June/July, pp.17-18、査読あり
5. 木下尚子 2007「琉球が沖縄になるとき」『考古学ジャーナル』no.564、ニューサイエンス社、p.1 、査読あり
6. 伊藤正彦 2008「明初里甲制体制の歴史的特質―宋元史研究の視角から―」『文学部論叢（熊本大学）』97pp.89～133、査読あり

7. 宮城弘樹・名島弥生ほか共著　2008 年「南西諸島の炭素 14 年代資料の集成」『南島考古』No.27 今帰仁村教育委員会 pp.23-48、査読なし
8. 宮城弘樹　2008 年「琉球出土銭貨の研究」『出土銭貨』第 28 号　出土銭貨研究会 pp.3-45、査読なし
9. 宮城弘樹　2008 年「考古学からみたグスク」『グスクと御嶽を考える』（今帰仁グスクを学ぶ会ミニシンポジウム資料集）第１巻、今帰仁グスクを学ぶ会　pp.49-60、査読なし
10. 金武正紀 2008「八重山における貿易陶磁器」『陶磁器から見た交流史』石垣市史考古ビジュアル版、第 5 巻、pp. 46～49、石垣市、査読あり
11. 金武正紀 2008「今帰仁城跡と首里城跡出土の陶磁器について」『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅲ』第１巻、pp. 40～56、今帰仁村教育委員会、査読なし
12. 新里亮人 2008「琉球列島出土の滑石製石鍋とその意義」『日琉交易の黎明』森話社、第１巻　pp.53～72、査読あり
13. 金武正紀 2008「今帰仁タイプ白磁碗」『今帰仁グスク』第２号　p.８、今帰仁グスクを学ぶ会、査読なし
14. 木下尚子 2007「ヤコウガイ大量出土遺跡の検討―6～8 世紀奄美大島の４遺跡を対象に」『文学部論叢』第 93 号、pp.1～22、熊本大学文学部、査読あり
15. 金武正紀 2007「今帰仁タイプ白磁碗」『南島考古』第 26 号， pp. 187～196、沖縄考古学会、査読なし
16. 金武正紀 2007「今帰仁城跡と今帰仁ムラ跡の発掘調査の意義」『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅲ』、第１巻 pp. 181～202、今帰仁村教育委員会編集、査読なし
17. 新里亮人 2007「カムィヤキとカムィヤキ古窯跡群」『東アジアの古代文化』第 130 号　pp.132～143、査読あり
18. 新里亮人 2007「九州と琉球列島の交流-中世並行期」『考古学ジャーナル』564 pp.32～36、査読あり

〔学会発表〕（計　５　件）

1. SHINZATO AKITO　2008”Kamuiyaki and Early Trade in the Ryukyu Islands”, Kingdom of the Coral Seas: A Symposium on the Archaeology and Culture of the Ryukyu Islands, KINGDOM OF THE CORAL ISLES:A SYMPOSIUM ON THE ARCHAEOLOGY AND CULTURE OF THE RYÛKYÛ ISLANDS (OKINAWA), Nov.17th.2007,London
2. Naoko Kinoshita 2008”Shell Trade from the Ryûkyû Islands and Their Links to East Asia “, KINGDOM OF THE CORAL ISLES:A SYMPOSIUM ON THE ARCHAEOLOGY AND CULTURE OF THE RYÛKYÛ ISLANDS (OKINAWA), Nov.17th.2007,London
3. 新里亮人、三辻利一　2008「徳之島、カムィヤキ窯群出土陶器、粘土、岩石の蛍光 X 線分析」『日本文化財科学会第 25 回大会(ポスター発表)』、鹿児島国際大学、6 月 14～15 日
4. 新里亮人　2007「奄美諸島における考古学研究の現状と課題」『第 40 回琉球大学史学会　新たなる奄美史像を求めて－奄美研究の現状と課題－』琉球大学、12 月 15 日
5. 栗建安 2007「宋・元代における福建の貿易陶磁と研究の現状」13～14 世紀海上貿易からみた琉球国成立要因の実証的研究－中国福建省を中心に－科学研究費共同研究成果発表会（5 月 19 日）沖縄県埋蔵文化財センター
6. 謝必震 2007「文献資料からみた福建と琉球間の航海」科学研究費共同研究成果発表会（5 月 19 日）沖縄県埋蔵文化財センター
7. 大田由紀夫 2007「宋元時代の『琉球』」科学研究費共同研究成果発表会（5 月 19 日）沖縄県埋蔵文化財センター
8. 田中克子 2007「沖縄出土の貿易陶磁の問題－福建産粗製白磁をめぐって－」科学研究費共同研究成果発表会（5 月 19 日）
9. 金武正紀 2007「今帰仁タイプ白磁とビロ

ースクタイプ白磁」科学研究費共同研究成果発表会（5 月 19 日）沖縄県埋蔵文化財センター

１０．　宮城弘樹 2007「沖縄のグスクと集落の関係について」―科学研究費共同研究成果発表会（5 月 19 日）沖縄県埋蔵文化財センター

１１．　新里亮人 2007「九州、琉球列島における中国陶磁器の消費動向－11 世紀～14 世紀を中心として－」―科学研究費共同研究成果発表会（5 月 19 日）沖縄県埋蔵文化財センター

１２．　伊藤正彦 2005「中国近世の社会的結合と国家」『中国前近代の経済・社会と国家』華東師範大学歴史系国際学術研討会、中日共同研検討班、9 月 9 日～11 東、華東師範大学

〔図書〕（計　４　件）

1．木下尚子（編）2009『平成 17～20 年度科学研究費補助金共同研究(A)(2)研究成果報告書 14 世紀の琉球と福建　研究代表者木下尚子』熊本大学文学部、pp.１-278

2．宮城弘樹ほか 2009『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅳ』今帰仁村教育委員会編集、288 頁

3．宮城弘樹ほか 2009『今帰仁城跡周辺遺跡』今帰仁村教育委員会編集、11 頁

4．田中克子ほか 2008『中世都市博多を掘る』海鳥社、pp.1～255

６．研究組織

(1)研究代表者

木下尚子（KINOSHITA　NAOKO）
熊本大学・文学部・教授
研究者番号：70169910

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

伊藤正彦（ITOH　MASAHIKO）
（2007 年度まで研究分担者）
熊本大学・文学部・准教授
研究者番号：50253711

小畑弘己（OBATA　HIROKI）
（2007 年度まで研究分担者）
熊本大学・文学部・准教授
研究者番号：80274679

大田由紀夫（OHTA　YUKIO）
（2007 年度まで研究分担者）
鹿児島大学・法文学部・教授
研究者番号：20295231